

## 「限界建築」の可能性に向けての一考察

### 日本の伝統技術と文化を活かした建築家のグローバルな活動実践例を通して

#### 日本の建築は「限界」なのか

周知の事実であるが現在、日本の建築業界もグローバル化の波に席卷されている。持続可能な社会を目指す、建築に関するかつての日本の伝統技術や文化も、都市や郊外にある類似の形態や機能をもつ街並みに覆い隠されている。建築基準法の改正、団塊世代の定年退職も始まった。企業倫理が問われる中、就職は売り手市場であり新卒者のほとんどがゼネコン、ハウスメーカー、組織設計事務所等の大手企業等に就職する機会は増加したが、ポストク問題やアトリエ系事務所の経営難等、若い世代のキャリアの選択肢を減少させている。もはや建築業界は「限界」を迎えているのではないだろうか。今、私たちはどのような建築的世界観を理想として或いは建築を職業として、また文化や芸術、技術をいかに継承してゆくべきなのだろうか。ここでは一つの方向の示唆として日本の地域から伝統技術や文化を基に土着的な実践を世界に向けて展開しているオルタナティブな建築的活動の可能性を見出してみたい。

#### グローバルな文化の再考

確かにこのような視点は懐古主義的で、現在の高速で展開される情報化社会にはそぐわない部分もあり、今さら何をと擲棄される等の批判もあるかもしれない。しかし、地域で活躍する建築家においての世界観ともいえよう、ローカルな場所でグローバル視野を持ち活動するグローバルと言われる考え方に賛同したい。一般的にも農村や森林、郊外への回帰現象はスローライフ、ロハス、エコツーリズム等として浸透し、その場に癒しを求めて行くことがブームとなっている。このように国内の地域と言われる場所からでも充分世界へ貢献できる可能性の基盤は広がりつつあるのではないだろうか。

一方で中山間地等の集落では、昨今の地域問題として「限界集落」が取り挙げられ久しい。しかし地域は悲観的問題ばかりでなく、福祉や高齢化に対するまちづくり活動の実践も顕著な中、その基本姿勢は法律や世論に縛られるのではなく小ささや遅ささえ受入れる土着的な地域文化や地域資源の再発掘から始めることではなかったのか。

#### 「限界」とは真なのか

かつて鶴見俊介は著作「限界芸術論」の中で、芸術とは美術館や階級制度によって規定されるものでなく、個人の日常的な利害を忘れさせ、日常的世界の外へ連れてゆき休息を与えるものであると述べ、非日常性を可能にする媒体として芸術を三つに分類した。一つは専門的芸術家によって生産され専門知識を兼ね備えた限られたエリート層に消費される「純粋芸術」、二つ目は特定の生産者や芸術家から企業や資本家の産業を経由してより広く一般大衆的に親しまれる「大衆芸術」、三つ目は非専門的芸術家によってつくられ、非専門的享受者に享受され、目立たぬ生活様式でありながら芸術としての側面を持っている「限界芸術」に分類した。三つの芸術はオーバーラップする場合もありえるが、「純粋芸術」と「大衆芸術」が新しいものに生まれ変わってゆくには「限界芸術」との積極的な対話が不可欠であると述べている。つまり、一部のエリートだけでなく非専門家、

一般人の生活にこそ芸術があると主張している。

そこで、建築業界の限界的な負の状況を打破するためにも「限界芸術」的な取組みを「限界建築」と前向きに定義したい。その事例として日本の伝統技術と文化を活かした建築家たちの「木」と「土」をテーマにした地域活動の実践を以下に紹介し考察してゆく。

#### 「限界」を越えて 森林、木造文化・国産材の復権と展開

木造では 2000 年を境にして「近くの山の木で家をつくらう運動」等住宅において国産材を活用した NPO の取組みが一般的にも広がった。同じく日本の森林をボランティアで守らう

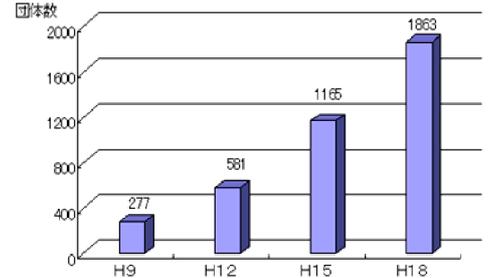


図 1: 森林ボランティア団体の推移

といった NPO などの市民団体数は、H12 年で 581 団体、H18 年で 1,863 団体と、増加傾向にあることからも理解できる。(図 1: 出典: 林野庁業務資料) 国産材を活用した民家型工法の在来木造設計に取組む岐阜県立森林アカデミーの三澤文字教授(2007 年「自力建設プロジェクト」に関する教育プログラムとその実践」建築学会教育賞(教育貢献)受賞)は毎年、自力建設(セルフビルド)で素人棟梁(図 2: 出典: アカデミーHP)という学生リーダーを立て、学内コンペで選ばれた木造建築物を学生主チーム主体で設計、施工し敷地内に東屋や駐輪所等を



図 2: 素人棟梁による自力建設

点在させている。さらに学内の木造建築スタジオの学生たちと共にオーストラリアシドニーの The University of New South Wales (UNSW) 大学で海外研修を行い、また岐阜県立森林アカデミーにも UNSW 大学の教員、学生を招き、双方の協力で岐阜という日本列島のほぼ中心地域から世界へと活動を広めている。

また、ヨーロッパの木造建築では元東洋大学の太田邦夫名誉教授による「東ヨーロッパの住居における木造架構の比較研究」(1985 年日本建築学会賞(論文)受賞)がある。近著「工匠たちの技と知恵」においては世界各地の古くからある無名の建築についてデザインや技法を取上げ、地域や時代の差を越えて現在の日本にも通用する普遍的なものについて紹介している。それらの対象としては世界に約 10 億戸の住居が潜んでいるという。

経済、効率優先の速いスピードと、森林、樹木の生長の遅いスピ

ードは合うことはない。木材を産出す林業は世代を越えての長スパンの作業である。林産地や農村の暮らしにおいて自然の道理に従う姿勢は日常的になされおり、現在の都市においても見習うべきことであろう。時間をかけての価値が一般的にも認知されるとなれば今後、例えばドイツで茅葺など日本文化の愛好家がいるように、いずれ木造においても国産材がヨーロッパ等にも輸出され、日本の木材を愛する人々も外国人にも多く現れるのではないだろうか。もっとも日本は国土の約7割が森林であり世界にも珍しい森林大国であり、品揃えの豊富な外材に頼るだけではもったいない。実際、国内最大の林産地である宮崎県ではアジア、中国に地元の杉を輸出する業者が現れている。

### 「限界」を越えて 左官・土の汎用 -

左官と建築といえば建築家の森田一弥氏の活躍が目覚ましい。氏は一級左官技能士兼一級建築士として京都市左京区の静原という集落に住居兼事務所を構えている。地域を拠点に京都はもちろん昨年度、若手芸術家在外研修員として1年間のスペイン滞在を経て海外の伝統技術の見聞も深い。近作としては「Concrete-pod」という茶室のようなスケール感を持つ超薄型コンクリートドーム空間があり、

日本の左官技術を応用し白セメントに軽量骨材やワラの繊維等を入れ、鏝でスタイロフォームの型枠に塗りつけ制作している。この作品は海外にも発表され、さらに類似の技法で「SSS:SAKAN Shell



図 3: SSS:SAKAN Shell Structure

Structure(図 3: 出典: 事務所 HP)という薄肉コンクリートシェル構造による災害発生時の仮設住宅の共同研究・開発プロジェクトも実施している。研究や制作においてワークショップ等を通じ設計者以外にも各研究者や専門家、学生とも連携された取組みである。

土では奈良市郊外に拠点を置くD環境造形システム研究所主宰の渡辺菊真氏による土嚢を活用した建築が注目される。国内のNGOと連携して中東、西アジアのヨルダン、アフリカのウガンダへとエコビレッジの計画と実践がなされている。土嚢建築の施工は専門職人の技術指導を受けながら建築専門外の素人学生や現地の住民で行われている。



図 4: 土嚢建築施工の様子

(図 4: 出典: 事務所 HP) そもそも土嚢は水害や土砂災害時等の土留めとして用いられ、ここでは地域の災害救援やそのシェルターとしても活かされている。

以上、両者共に左官技術や土を活用した建築で災害時に日本は勿論、ほぼ世界中で手に入る土に着目したグローバルな活動と捉えることができる。とりわけ日本では1995年の阪神淡路大震災を境に当時のボランティアたちの救済活動が1998年にNPO法施行のきつ

かけとなった事実からも災害救援と市民の力の関係は相互作用を施しており、世界へ向けてもさらなる発展を遂げているといえる。

### 「限界建築」は飛躍するために地固めを

木や土という昔ながらの日本の素材を活かした伝統技術が国内地域から建築家に見直され都市での積極的活用というより世界各地での活用がなされている。これは例えば今や日本文化ともいえるアニメやマンガが海外で新たに受け入れられているような一般社会のムーブメントには及ばないだろうが、建築が専門誌以外の一般雑誌にも紹介されて久しいように日常的な当然の行いとして萌芽の可能性に満ちているといえないだろうか。さらに批判的工学主義を提唱する建築家の藤村龍至氏は、冊子「ROUND ABOUT JOURNAL」第6号で、「ブログの日常性と専門誌の一般性を繋ぐ、新しい議論の場を設計しようとしています」と述べている。この言葉を借りるとすれば、「限界建築」は専門家が伝統技術や地域文化、生活の日常性と非専門家や地域住民とを一般性を持って繋ぐ実践活動の場を新たに見出そうとしているといえよう。しかしながら、氏の主張にあるような組織事務所とアトリエ事務所以外の新しい設計集団として場所と所との本質があるとし、例え失われたとしても非場所においていかに建築が場所の固有性を獲得し開花させることができるかを追求しようとしている姿勢は「限界建築」は持ち得ない。あくまで場所ありきの土着性が根底にない限り消滅するに等しい。なぜなら専門家、建築家だけの独断では地域住民の理解を得られるはずもなく、未解決の世界各地の地域問題を長期的なベクトルで歴史や文化を発掘し未来へ繋げていくことを使命としているからである。地場が緩ければ固めるべく活動を継続することが先決で愛着を持ち続け地道に幅広い世代やジャンルの賛同者と共に取組み続けることが何よりの力となるのである。

### いかに繋ぐか - 「限界建築」の行方 -

共同作業の手段としてはプロセスを重視するワークショップがある。建築やまちづくり活動でも活発であり習慣化し表層的に扱われている感もあるがその本質に期待したい。環境教育におけるワークショップ研究の第一人者でもある都留文科大学の高田研教授は、哲学者のJ・ハーバースの「社会において専門家の専門知と、素人の生活知が遊離している。それを縫合する取り組みがさまざまなところで起こっているが、既存のシステムでは解決できない。だから人々は新しい場所なり空間なりを求めている」という指摘をもとに、ワークショップは専門知と生活知とをつなぎ直す新しい空間であると定義している。工場が量や速さを追求するのに対して、ワークショップは人と人とが対面でしかも手作業で個性を追求していく「知の縫製工房」として例えている。このようなワークショップにおいてのアイズブレイク、ファシリテーション、振り返りなどの手法から「限界建築」の意味やシステム等を議論し、解釈し、評価することにより、さらなる繋がりを維持してゆくであろう。「限界建築」は非専門家(地域住民等、素人)たちの生活や文化を専門家(建築家等)が再発掘し、両者が同じ場所において技術を磨き共同作業で関係をつくりあげてゆく建築としての側面を持ち続けるのである。世界遺産や有名建築との優越でなく価値ある地域遺産として世間からの評価を期待したい。

\* 戸田都生男 大阪芸術大学建築学科卒業 Ms 建築設計事務所、京都造形芸術大学環境デザイン学科副手を経て現在、(財)啓明社 特別研究員